



第 59 回 縄文時代— その 2

縄文土器の研究の画期はまず土器の相対的年代決定であった。一つの土地を掘り下げるとその地層によってさまざまな土器が出土するが、下から出る土器は上から出る土器より古いと考えねばならない。多くの発掘場所におけるこのような比較研究によって、土器の相対的年代の決定が可能になった。草創期・早期・前期・中期・後期・晩期という分類が用いられるようになったが、それはあくまでも相対的な年代の決定である。一つの土器が何年前につくられたかという絶対年代については、そのような方法ではまったく何にもいうことができない。

その絶対年代については、炭素の同位元素 C^{14} を測定する方法によって測ることができるようになった。この方法によって縄文土器を鑑定したところ、驚くべき数値が出た。たとえば長崎県の福井洞窟で発掘された土器は、実にマイナス 1 万 2 0 0 0 年を数えた。つまり、紀元前 1 万年にできた土器ということになる。文明の発祥地と考えられるメソポタミアで発掘されたもっとも古い土器はマイナス 8 0 0 0 年である。それまで土器は、農耕とともに発明されたのではないかという漠然たる常識が存在していた。もしカーボン鑑定の結果を信ずるなら、日本の土器は世界最古の土器であり、狩猟採集という原始的な生産に方法のもとに生活していた原始日本人は世界に先駆けて土器製造の技術を知っていたことになる。

しかし、相対的年代決定に画期的業績を上げた考古学の山内清男はこのカーボン鑑定の結果に大反対をした。第一人者がいうのだから、その説に逆らうことは難しい。山内清男は日本の土器の発生をほぼ 5 0 0 0 年前に置いたが、それにはなんの根拠もなかった。しかし、その後さまざまな自然科学を応用する土器鑑定の方法が生まれたが、その結果はカーボン鑑定の結果とほぼ一致するのである。1 9 7 0 年の山内清男の死後には、カーボン鑑定の結果に決定的な疑いを抱く考古学者は少なくなった。こうしてこの科学的鑑定方法はやっと考古学に取り入れられ、今から約 1 万 2 0 0 0 年前から 7 0 0 0 年前までの間を縄文時代草創期および早期、7 0 0 0 年前から 5 0 0 0 前を前期、5 0 0 0 年前から 4 0 0 0 前を中期、4 0 0 0 前から 3 0 0 0 前を後期、3 0 0 0 年前から 2 0 0 0 前を晩期ということになったのである。縄文土器についての考古学的研究はこのように進んでいった。

縄文土器の考古学的研究は着々と進んでいったが、ここで考古学的遺品にすぎなかった縄文土器を芸術品であると断言する岡本太郎が現われた。縄文土器に、彼が日本の最も優れた芸術を或いは唯一の芸術を見たのは深い理由があつてのことである。彼は抽象芸術家であり、その抽象芸術の本場であるパリで、抽象芸術とは何かと言うことを身をもって学んだのである。抽象芸術の開祖はピカソであり、当時岡本太郎は誰よりもピカソを尊敬していたのである。

ピカソはどうして抽象芸術を創造したのか。それは、よくいわれるようにアフリカの黒人芸術の影響であったといわねばならない。丁度一時代前の印象派の画家たち、ゴッホやゴーギャンやセザンヌが日本の浮世絵の影響を強く受けて新しい芸術運動をはじめたように、ピカソは黒人芸術の影響を強く受けて新しい芸術運動を始めたのである。例えばピカソの、正面から見た顔と側面から見た顔が同一画面で表現されているような絵は、しばしば類似のものが黒人芸術にみられる。顔と胴体がいちじるしくアンバランスなもの、或いは動物とも人間とも分からないような顔、そういうものの原形は黒人芸術にみられるのであるが、ピカソはそれに影響されて、当時の芸術の常識からみれば奇怪としか思われなような抽象芸術の運動を始めたのである。

19 世紀末には完成していたリアリズム芸術をくずして新しい芸術を創造せよ、そういう新しい芸術運動の第一歩が印象派であつて、印象派は画面をひかりと色に解体した。しかしそれだけでは不十分である。一切の具象的な形を否定して色と形で自由な芸術を作る、そういう芸術意欲に燃えたピカソをはじめとする若い芸術家にとって、黒人芸術は何と魅力的なものに映つたことであろう。そしてそれに影響を受けて抽象芸術は発生し、約 1 世紀の間、世界の芸術界を風靡したのである。その芸術運動の波はやがて日本まで訪れ、岡本太郎は戦後の日本におけるこの新芸術運動の輝ける旗手であつたのである。

今から 1 万 2 0 0 0 年前といえば、まだ日本列島は出来上がっていないかららしい。ちょうど今から 3 万年から 2 万年のあいだ、1 万年間続いた、第三氷期が終わって地球の温度が上がり、海の氷が溶けはじめたのである。氷が溶けると海水の量が多くなり、その分だけ海面は上がる。こうして海はふくれあがり、日本

海が出来て日本列島を大陸から切り離したのである。この海の盛り上がり「縄文海進」といい、この海進は約5500年前に頂点に達した。日本列島のいたる所に「ここは昔海だった」というような伝承が残っており、貝塚は縄文海進を説明できる一番の遺跡であるらしい。このような日本列島の成立という大きな歴史がはじまったときに、縄文土器は作られ始めたのである。

土器の発明は、食生活の改良に有用であったと思われる。土器がなければ人間は植物や動物を生で食べるか、それとも焼いて食べるかのどちらかである。生のものはとくに衛生に問題があるし、焼いても植物や動物の中まで火が通るとは限らない。しかし土器が出来てそれを利用すれば、どんな動物や植物も芯まで熱が通り、安全に食べられるようになる。縄文時代の食事の中心は鍋料理であったと思われる。ドングリをつぶしてアクを抜き、ダンゴのようにして汁の中に入れる。そしてそこに山菜や魚、時には動物の肉もほうりこむのである。今でも日本の各地に、特に縄文文化が栄えた地域に残るさまざまな鍋料理は、この縄文の食事の名残といってよいであろう。

食材を煮炊きするために、縄文土器で最も一般的であったのは深鉢形土器であり、これが最も多く作られた容器であった。縄文土器はその発明の当初から一貫して深鉢形土器を中心に展開していった。草創期の土器は、当時の身の回りの道具―樹皮製の網籠や獣皮の革袋などの容器―を真似て作られたとする考えがある。草創期の土器の底が丸底のみではなく隅丸方形を呈している点などは編籠を真似て、文様自体がそうした容器の一部を特徴的に表現したのかも知れまい。

世界の先史時代の土器と比べて、縄文土器がユニークであることの一つに、口縁部の形状がある。早期になると波状口縁を有する深鉢型土器が出現し、以降、縄文土器は頻度の差こそあれ、波状口縁を有する器を作り続ける。こうした波状口縁が最も顕在化したのは縄文時代中期であり、器面の立体的な装飾とともに、口縁部と胴部の均衡が不安定ともいえるような土器が作られていった。こうした波状口縁は、煮炊きの道具としての機能を考えるだけであれば、いかにも扱いづらいものが多い。とくに波状口縁に付けられた大型の突起は、本来の機能からすれば、調理しにくく、料理を取り出しにくい構造であろう。しかし、縄文人は波状口縁や、それに伴う突起装飾を作ることの止めなかったばかりか、中期の場合、隣接する他地域の土器と競合し呼応するかのよう、相互に影響を与えつつ、いっそう立体的で装飾性に富む「使いづらい」土器を作り上げていったのである。勝坂式土器と阿玉台式土器、火焰型土器と焼町土器などはその好例であろう。

縄文土器には波状口縁以外にも、口縁部に個性的な装飾を施す例が多い。例えば前期の諸磯式土器の獣面把手や、北陸地方を代表する新保式期の通称「鳥さん土器」（図1）、長野尖石遺跡出土の蛇体把手付深鉢型土器（図2）のように容器の上端に動物もしくは動物を模した装飾が特徴的に施されるのである。土器表面の文様装飾ではなく、あえて器面から独立させたこのような立体装飾は、目立つからこそ意味があり、同時にまた目立たせる必要があったのであろう。同様に、現代人から見ると一見意味がわからない、円形や渦巻き状など幾何学的な突起や把手も、その土器をたらしめる表象として必要不可欠な要素であったと十分考えられる。

（岡野 実）



●図1：鳥形把手付鉢形土器



●図2：蛇体把手付深鉢形土器

文献（1）特別展 縄文－1万年の美の鼓動 東京国立博物館 （2018）
（2）縄文の神秘 梅原 猛 学研M文庫 （2013）